

『更級日記』概説（Ⅰ）

伊藤 守幸

はじめに

ここ数年、筆者は、Sonja Arntzen氏の協力を得て『更級日記』（1060年以降）の英訳に取り組んでいる。現在、本文の訳出と注の作成は終えているのだが、Introductionの作成に思いがけず時間を要している。この難渋の理由は色々と挙げられるが、多面的性格を有する『更級日記』の全容を正確に伝えるため、できるだけ詳しい解説を作ろうとしていることと、それと裏腹に、英語圏の一般読者向けの文章を書き慣れていないため、読者層に応じた解説内容の選択に困難を感じているというのが、主な原因である。

本稿は、そのIntroductionの冒頭の2節に相当するが、この文章も、英語版の作成過程においては、当然のことながら翻訳に伴う修正が加えられることになる。

ところで、本論に入る前に、ひとつの挿話を記しておきたい。

2009年の秋、Arntzen氏による『更級日記』に関する特別講義が、ブリティッシュ・コロンビア大学人文学部で実施された¹。その際、作成中の英訳『更級日記』が教材として用いられたのだが、その授業に対する学生のレポートが筆者の許にも届けられた。このレポートでは、受講生に対してあらかじめいくつかの質問が与えられており、それはたとえば、『更級日記』の中で理解しにくいのはどんな部分か、興味を惹かれたのはどんな部分か、「解説」ではどういう項目を取り上げるべきか等といったものである。多くの学生は、用意された質問事項に応じて作品と作者に関する意見を記していたが、中には、英語を母語としない筆者とArntzen氏の間で、どのように意見交換が行なわれたのかと、共同研究の実態について問う学生もいた。更にこの学生は、すでに翻訳の存在する作品を新たに訳出することの意味についても尋ねているので、以下、この間に答える形で、母語を異にする者同士が協力して日本古典文学の翻訳に当たることの利点に

¹ 2009年11月3日、Stefania Burk博士の“Japanese Women's Self-Writing”というクラスで実施。

触れて、端書に代えたい。

分かりやすい例として、『更級日記』の冒頭を挙げてみる。

あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間宵居などに、姉継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままにそらにいかでかおほえ語らむ、いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京にとく上げたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」と、身を捨てて額をつき祈り申すほどに、十三になる年、のぼらむとて九月三日門出して、いまたちといふ所にうつる²。

書き出しの引歌表現（「あづま路の道の果てなる常陸帯のかごとばかりもあひ見てしかな」『古今和歌六帖』10世紀末、紀友則、?～905年頃）を除けば、特に難しいところのない文章である。ただし、この平易な文章には、作品の起点に都への旅立ちを重ね、更にはその上洛の旅に、物語を求める旅という意味を重ねることによって、開巻劈頭で作品の中心的主題を提示するという、巧緻な仕掛けが施されている。ただ、この仕掛けそのものは、鋭敏な読者であれば、日本語を母語としなくとも（あるいは英訳で読んだとしても）気づくことのできる仕掛けである。しかし、この文章には、更に微細な文体のレベルにおいても、周到な仕掛けが施されているのである。

『更級日記』の冒頭部は、一見して読みやすい文体で書かれているが、その読みやすさは、たとえば『和泉式部日記』（1007年頃）や『紫式部日記』（1010年頃）の起筆部の流麗な文体と比べた場合、微妙な違和感（あるいは抵抗感）を読者に覚えさせるものでもある。ただし、その点は、これまで日本の研究者の間でも余り問題にされることはなかったもので、日本語話者にさえ見過ごされるほど微妙な問題なのだとも言える。まして、英語を母語とする者が翻訳に取り組んだ場合、このような文体レベルの微細な問題は、最も見過ごされやすいものと言えよう。

現在流布しているIvan Morris訳『更級日記』（“As I Crossed a Bridge of Dreams” Penguin Classics, 1975年）は、上掲の起筆部を次のように訳している（後半部は省略）。

I was brought up in a part of the country so remote that it lies beyond the end of the

² 『更級日記』本文の引用は、新潮日本古典集成『更級日記』（秋山虔校注）による。

Great East Road. What an uncouth creature I must have been in those days! Yet even shut away in the provinces I somehow came to hear that the world contained things known as Tales, and from that moment my greatest desire was to read them for myself. To idle away the time, my sister, my stepmother, and others in the household would tell me stories from the Tales, including episodes about Genji, the Shining Prince; but, since they had to depend on their memories, they could not possibly tell me all I wanted to know and their stories only made me more curious than ever.

『更級日記』起筆部の原文から読み取られる微妙な違和感を一言で表現するならば、それは「くくだしさ」である。書き出しから直ぐに「いかばかりかは」、「いかに思ひはじめけることにか」、「いかで見ばや」と同じような表現が繰り返される。これは如何にも稚拙な印象を与える文体である。更に、同語反復とは異なるものの、同様にくくだしい印象を与える言い回しとして、「つれづれなる昼間宵居」、「その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど」、「人まにみそかに入りつつ」といった表現が重ねられるのである。同種の表現がこれだけ繰り返されると、わざとらしささえ感じられるのだが、実は作者は、こうした文体を意図的に作り出しているのである。そのことは、このような言い回しが、少女時代の記事には頻出するのに、中年期以降の記事からは影を潜めることから明らかである。晩年の和泉紀行の文章などを見ると、孝標女は『源氏物語』の文体を完璧に自家薬籠中の物としている。先ほど引き合いに出した『和泉式部日記』や『紫式部日記』がそうであるように、作品の起筆部には、一般に彫琢を重ねた美しい文章が置かれるものの、『源氏物語』的美文を自在に書きこなせる孝標女が、こどもらしさを演出するために、敢えて稚拙とも受け取られかねない文章を冒頭に据えたのは、実に大胆な試みと言わざるを得ない。James Joyce（1882年～1941年）の時代ならともかく、平安時代（794年～1185年）の作品において、このような文体の実験が試みられていることの意味については、十分に留意する必要がある。

ところで、Ivan Morrisには、この実験的文体もただの稚拙な表現と受け取られたようである。彼の訳文では、たとえば「つれづれなる昼間宵居」は、“To idle away the time,” に、「その物語、かの物語」は、“stories from the Tales” に、すっきりと整理されている。これはMorris流のおとなの文体であり、この方が読者の違和感は解消されるに違いないが、それによって、『更級日記』の原文に施された文体的工夫の跡も消されてしまったのである。また、翻訳箇所は、息の長い一文で綴られているが、Morris 訳は、それを短文を重ねる形に改変しており、この点でも、読者の読み易さへの配慮が、原典の持ち味を生かすことよりも優先されているのである。

以上、分かりやすい事例をひとつだけ挙げてみたが、このような繊細微妙な解釈上の問題について検討する際に、日本人研究者を交えて議論を重ねることは、翻訳の精度を高める上で不可欠な条件と言ってよい。それが、すでにMorris訳が存在するのに、なぜ新たな訳出を試みるのかという問に対する、ひとつの解答でもある。

最後に、Arntzen & Ito訳の起筆部を紹介して、引き続き「解説」の本論に進むことにする。

As a person brought up in the back of beyond, even further than the end of the road to the East Country, how rustic and odd I must have been, but, however it was that I first became enthralled with them, once I knew that such things as tales existed in the world, all I could think of over and over was how much I wanted to read them. At leisure times during the day and evening, when I heard my elder sister and step-mother tell bits and pieces of this or that tale, or talk about what the Shining Genji was like, my desire to read these tales for myself only increased; (for how could they recite the tales to my satisfaction from memory alone?)

1 日記文学の始原——漢文日記と仮名日記

平安時代以来、日本では優れた文学性を有する日記が数多く記されてきた。そのため日本文学史の記述においては、「日記文学」という項目を立てて、一群の日記作品を総括的に論じることが一般化している。とりわけ平安時代の日記に対する評価や関心は高いのだが、この時代には、紀貫之（868年頃～945年頃）や紫式部（生没年未詳）、和泉式部（生没年未詳）といった、後に日本文学史を代表することになる作家や歌人が、優れた日記作品を書き残しているわけだから、1000年という時間を超えて、それらの日記が常に高い関心を集めて来たのも当然のことと言える。ただし、こうした日本文学史のありようは、世界文学史の観点からはきわめて例外的な事態と言わざるを得ない。なぜ、日本では文学作品として評価される日記が輩出したのか。その経緯を明らかにするために、日本における日記の来歴を簡単に遡ってみよう。

日本列島（北海道、南西諸島等を除く）に、中国から学んだ法制度を基盤とする国家体制が確立したのは7世紀後半のことだが、中国の文物の移入はそれ以前から続いており、とりわけ文字言語に関しては、もともと書き言葉を持たない日本語は、専ら中国語に依存していたのである。当時の公文書はすべて漢文（文字言語としての中国語）によって記されているし、『万葉集』（8世紀末）の表記法に端的な形で認められるように、

日本の和歌を記述する際にも、漢字の「音」を借用し、漢字を音節文字のように利用することが行われていたのである³。日本語を書くために画数の多い漢字を利用するのは、きわめて効率の悪い方法だが、9世紀後半に至るまで、それが日本語を書き表す唯一の手段だったのである。

文学史上の興味深い事実として、『万葉集』という巨大な歌集の完成後、歌集ではなく漢詩集の編纂が相次いだことが知られているが、こうした文学史の展開と、文字言語として漢字を借用するしかなかった当時の言語状況が、密接に関連することは言うまでもない。『万葉集』的な和歌表記法は、作者の側にも読者の側にも、多くの困難を強いたのである。日本語を表記する音節文字としての仮名が発明され、歌集の編纂が盛んに行なわれるようになるまでには、『万葉集』の成立から更に1世紀以上の時間を要したのであった。

さて、日記に話を戻すと、たとえば、奈良時代（710年～794年）から平安時代にかけて編纂された日本の正史は、すべて漢文で書かれているし、中央官庁の記録（これも「日記」と呼ばれる）や私的な日記も、男性官人の書き残したものは、原則的に漢文で記されている。すなわち、漢文を公用語のように用いていた当時の男性社会において、日記と言えばそうした漢文日記を指したのである。それらの漢文日記は、出来事の記録に主眼が置かれ、基本的に日録形式で記されている。平安時代の漢文日記の中には、後世の写本のみならず原典が今日まで伝えられているものも存在し、そうした継承の仕方からも、漢文日記が史料として重んじられてきたことは明らかなのだが、その一方で、それらの日記は、長い歴史を通じて読者の文学的関心を惹くことはなかったのである⁴。それに対して、「日記」と称しながらも不特定多数の読者を獲得し、日本文学史上に「日記文学」という特異な様式を確立したのは、仮名で書かれた日記である。

漢字の草体を更に簡略化することによって、日本語を表記するための音節文字としての平仮名が発明されたのは、9世紀後半のことである。簡便で効率的な仮名は、それ以後急速に普及することになる。905年には、最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』が編纂されるが、この歌集は、漢文の序文を除くと、基本的に全編が仮名で表記されてい

³ 『万葉集』の和歌表記の実態は、漢字の意味を捨てて音だけを利用する表記法（一字一音の当て字）と、漢字の意味を踏まえた表記法（漢字を日本語として訓読する方法）とが混在している。その内、訓読については、同義語の存在が問題となる。すなわち、同じ漢字の意味を表す複数の日本語表現が存在し、そのいずれもが和歌の音数律に適合するとき、こうした表記法では唯一の読み方を決定するのが難しくなるのである。この困難は原理的なものであり、『万葉集』の同時代の読者にとっても避け難いものであった。

⁴ 日本では、最近になって文学研究の立場から漢文日記を読み直そうという気運が生じつつある。ただし、どのような視点から捉え直すとしても、仮名日記と漢文日記の間に存在する基本的懸隔は、誰の目にも明らかである。

る（漢語等の表記に多少の漢字は用いられるが）。文学史上最初の勅撰和歌集として、和歌の地位を漢詩（最初の勅撰漢詩集は、814年に成立）と同列に位置づけた『古今和歌集』は、公的に権威づけられた最初の仮名文学でもあったのである。

『古今和歌集』には、漢文の序文の他に仮名序も付されているが、歌集の序文が仮名（すなわち日本語）で書かれたのは、これが最初である。そして、この仮名序の筆者こそ、後に最初の仮名日記である『土佐日記』（935年頃）を執筆することにもなる、紀貫之であった。紀貫之がこの世に生を享けたのは、仮名の発明と同時期であり、彼の生涯は、仮名表現の発達期と完全に重なっている。というよりも、『古今和歌集』を編纂し、その序文を仮名文で記し、更には文芸性に富む仮名日記という新たな様式までも生み出した貫之こそが、仮名表現の偉大な開拓者だったと言う方が正確だろう。

『土佐日記』は、土佐守紀貫之の都への帰任の旅という明確な枠組を有する作品である。ただし、2カ月の旅の記録というコンパクトで堅固な外観とは裏腹に、この日記の内実は、多くの主題的要素を内包する自由で実験的な作品として書き上げられている。『土佐日記』の中に描かれた紀貫之は、場面に応じて様々な姿を見させている。あるときは土佐守として送別の宴に臨み、道中の無事を祈り、悪天候や海賊の襲来を心配したりする一方、当代一流の歌人としての力量を発揮し、多くの歌を創作したり、和歌や芸術に関する批評家的（あるいは指導者的）発言を繰り返したりもする。更には、任地で亡くした娘のことを追懐する父親としての姿や、周囲の人々の言動に辛辣なまなざしを向ける老人としての姿も印象的に叙述されている。

熟練した作家である貫之は、『土佐日記』の執筆に当たって、自身の人生観や芸術観を自在に開陳する場として、物語以上に束縛の少ない、仮名日記という新たな文芸様式の創出を試みたのではあるまいか。その結果、この日記は、土佐からの船旅を描く紀行文という枠組の中に、当代最良の知識人による諷刺と諧謔の魅力に富む言説を盛り込んだ、斬新な作品として書き上げられたのである。

こうした『土佐日記』の特徴を勘案するとき、男性官人として漢文日記をつける習慣を有する貫之が、従来の漢文日記とはまったく異質な作品として、この仮名日記を構想したことは明らかであり、老境に入った芸術家の示す、進取の気象に富む若々しさ、その精神の柔軟さに読者は驚かされるのである。

ところで、仮名日記の歴史の中で『土佐日記』を捉え直すとき、日記文学の原点に位置する『土佐日記』と、他の平安中期の仮名日記との間には、ある決定的な違いが存在する。それは、『土佐日記』が男性によって書かれているという点である。同時にこの日記は、男性の作者が女性の語り手を仮構しているという点でも例外的な作品である。

貫之が女性仮託という方法を用いた理由については、従来も様々な説が示されており、単純な理由によるとは思われないが、男性の書く仮名日記というものに対する違和感（作者にも読者にも共有されるはずの違和感）もまた、その理由の一つと考えられる。仮名日記という新たな文芸様式を切り開いた『土佐日記』が、単なる表現形式の目新しさにとどまらない、豊かな文学的可能性を開示して見せたにもかかわらず、その後、男性作家の側に同様の試みに挑む者が現れなかったのは（あるいは、そうした作品が現存しないのは）、文学史上の重要な謎の一つであるが、この奇妙な事態も、仮名日記に対する男性作家の抵抗感の大きさを示唆するものと言えそうである。男性たちが漢文で日記をつける習慣を有していたという事実は、少なくとも彼らの仮名日記執筆を後押しする条件とはならなかったのである。

仮名日記という新しい文芸様式の誕生について考える際には、仮名の発明という前提条件を踏まえて、文化史上の重大な転換点という文脈を押さえておく必要があるから、単純にひとりの作家の構想力の問題という観点だけから捉えることはできない。しかし、それにしても、文学史上の『土佐日記』の孤立ぶりを見るにつけ、紀貫之の冒険的な試みがなかったなら、仮名日記の登場が大幅に遅れたことは明らかであり、優れた作家の果たす文学史的役割の大きさについて、改めて考えさせられるのである。

2 日記と物語の関係をめぐって——『蜻蛉日記』・『源氏物語』・『更級日記』

『土佐日記』に続く仮名日記の登場は、40年も後のことになる。藤原道綱母（936年頃～995年頃）によって記された『蜻蛉日記』（975年頃）が、それである。『蜻蛉日記』は、女性の手に成る最初の仮名日記であるが、内容の面でも斬新にしてユニークな実質を備えている。すなわち、『蜻蛉日記』は、女性が自らの言葉で自身の人生について語った（それも断片的にではなく、全体的に人生を捉え直そうとした）、最初の自伝作品なのである。

『蜻蛉日記』の筆を執った道綱母が、仮名日記の先蹤としての『土佐日記』を意識しなかったはずはないが、両者の間に重要な影響関係は認められない。『土佐日記』が、2カ月の旅の記録として都の外側の世界を描いているのに対して、『蜻蛉日記』は20年以上の時間と『土佐日記』の7倍の記事量を内包し、しかもそれらの記事の多くが都での日常を描いている以上、この2作品の間に接点が少ないのは、ある意味で当然のことと言える。そして、文学史的に見ても、『蜻蛉日記』の登場は『土佐日記』の場合とは対照的な事態を惹き起こしている。すなわち、追隨する男性作家の現れなかった『土佐日記』の場合とは逆に、『蜻蛉日記』の登場以降、多くの女性作家が日記の筆を執ることになるのである。

道綱母の次世代には、清少納言（生没年未詳）、和泉式部、紫式部、菅原孝標女（1008年～?）といった優れた女性作家、歌人が輩出する。彼女たちの活躍によって、11世紀の仮名文学の世界は、女性に主導される観を呈するのだが、これは、世界史的に見て類例のない出来事である。そして、この稀有な事態を実現した作家たちが、こぞって日記を記しているのである。彼女たちの書き残した、『枕草子』⁵（1000年頃）、『和泉式部日記』、『紫式部日記』、『更級日記』といった作品は、いずれも個性的で興味深い内容を有しているが、紙幅の都合上、『更級日記』以外の作品の具体的内容については省略し、一つだけ、物語と日記の関係をめぐる重要な論点について触れておくことにする。

以下に論及するのは、『蜻蛉日記』に示された「古物語」に対する批判と、『更級日記』に記された物語への憧憬との関係である。そして、ここで問題にされる物語と日記の関係は、より普遍的に、虚構と事実の関係、幻想と現実（あるいは幻滅）の関係などとも言い換え可能なものであり、西欧近代小説の成立期に発見された問題とも通じるところのある問題かと思われる。

古くさい騎士道物語を読み続けた挙げ句、頭の中にまで黴の生えてしまった男を主人公として、先行文学に対する透徹した批判精神に貫かれた作品をMiguel de Cervantes（1547年～1616年）が書き上げたとき、前代の物語文学とは異なる新たな文芸様式が誕生することとなった。——たとえば、ヨーロッパ近代小説の重要な起点として『ドン・キホーテ』（前編1605年、後編1615年）を位置づける、こうした文学史の見取り図が成り立つとすれば、近代小説とは、そもそもその始まりからして、「読むこと」と「書くこと」の意味をめぐる内省と切り離せないものだったと言えるのだが、日本文学とりわけ平安文学に親しんでいる者の立場からすると、「読むこと」と「書くこと」をめぐるこの種の内省など、日本では近代を待つまでもなく、1000年前にすでに女性作家たちの間で共有されていたことが知られるのである。

女性の手に成る最古の仮名日記である『蜻蛉日記』は、その序文において、世の中に流布する古物語には「そらごと」が多いと指摘し、それに対して、自分は「身の上」のことを日記に記すと宣言するのである。『蜻蛉日記』の作者藤原道綱母が、中流貴族である受領階層に属しながら、摂関家という上流貴族の御曹司に求婚され、結ばれていることを思えば、彼女の人生は、そのまま「古物語」に類出する話型（シンデレラ物語的

⁵『枕草子』のスタイルを、一義的に捉えることは困難である。日記的章段、随想的章段、類聚的章段の集合体というのが実態だが、多分に日記的性格を有することは間違いない。また、ここで名前を挙げた紀貫之、道綱母、清少納言、和泉式部、紫式部といった作家は、日記以外に、文学的にも史料的にも興味深い歌集を残している。

話型)と重なるのだが、貴公子との結婚によってめでたく結ばれる古物語とは異なり、『蜻蛉日記』は、高貴な男性との結婚生活の苦悩に満ちた現実を、延々と語り続けてやまないのである。こうした『蜻蛉日記』の内実に照らすとき、道綱母が、古物語の何を「そらごと」と見なしていたかは明らかである。

道綱母の次世代の作家である紫式部が、『源氏物語』を構想したとき、彼女の前にはすでに『蜻蛉日記』が存在したわけだから、その序文に記された古物語に対する批判を無視したまま、新たな物語を書き進めるわけに行かなかったことは想像に難くない。実のところ、『源氏物語』の執筆に当たって紫式部が常に『蜻蛉日記』を意識していたであろうことは、『源氏物語』の筋書きや人物造形の手法を表面的に見るだけでも、直ちに了解できる。たとえば、光源氏や紫上といった主人公たちの人生を、生涯の全体にわたって丁寧に描いていること、とりわけ青年期の浪漫的恋物語よりも中年期以降の記述に筆を割いている点や、初々しくも純真な恋物語を演じていた登場人物たち（たとえば夕霧と雲居雁）の、その後の意外な結婚生活が点綴されている点などは、『蜻蛉日記』の物語批判に応えようとする姿勢が顕著に窺えるところである（総じて『源氏物語』に描かれた夫婦仲は、苦い後味を残すものが多く、『蜻蛉日記』の読後感と通じるところがある）。ある意味で『源氏物語』は、『蜻蛉日記』の物語批判と真摯に向かい合うことによって、物語文学の水準を一新することに成功したとも言えるのである⁶。

紫式部が、物語に対する鋭い批評意識の持ち主であったことは、『源氏物語』や『紫式部日記』の随所に窺われるが、とりわけ『源氏物語』の蜚巻では、主人公光源氏の口を借りて、長大な物語論が展開されている。この物語論の背後には、物語愛好者である玉鬘の気を惹こうとする光源氏の意図が存在するため、基本的に物語に対して肯定的な論が展開されている。ただし、源氏の意図はそれとして、この物語論の中で展開される論理は緻密にして周到であり、そこには紫式部自身の物語観がかなり直接的に反映していると考えられる。そして、この議論の中で、光源氏は「日本紀などは、ただかたそばぞかし」とまで言い放つのである。日本の正史より物語に価値を置くかのようなこの発言を記したとき、紫式部は、自身の書き進める物語が、『蜻蛉日記』の素朴な「そらごと」批判の及ばない地点に辿り着こうとしていることに、確信と自負の思いを抱いたに

⁶ 生涯を通じて『源氏物語』の善本を求め、書写を繰り返した藤原定家が、同時に『蜻蛉日記』や『更級日記』の寫本と筆写を重ねていたことを思えば、ここに述べたような『源氏物語』と日記文学の関係について、早くから気づいた読者がいたとしても不思議ではない。菅原孝標女は、そのことに最も早く気づいた読者の一人である。なお、英語圏に初めて本格的に『源氏物語』を翻訳・紹介したArthur Waley (1889年～1966年。Waley訳“The Tale of Genji”全6巻は、1925年～1933年にかけて刊行された)もまた、『蜻蛉日記』と『源氏物語』の関係を重視していたことが、井原真理子によって論じられている(『アーサー・ウェリーの源氏物語論』、『国文学』2009年2月臨時増刊号、学燈社)。

違いないのである。そして、紫式部の次の世代になると、そんな『源氏物語』との関係そのものを「身の上」のこととして描く日記が登場するのである。

『更級日記』の冒頭、田舎に身を置く少女が、姉や継母の語りを通じて、物語への憧れを募らせて行く場面は印象的だが、これを孝標女の伯母の記した『蜻蛉日記』の序文と並べてみると、そのあからさまなまでの対照性は、10世紀末から11世紀半ばにかけての数十年の間に、「読むこと」と「書くこと」の関係をめぐって、途方もない文学史的変容が重ねられたことを浮かび上がらせているのである。

『蜻蛉日記』の序文が、「世の中におほかる古物語の端などを見れば、世におほかるそらごとだにあり」という、物語批判とも目される文言を含んでいることは先述した通りだが、それに対して、『更級日記』の起筆部においては、きわめて素朴な形で、物語へのひたむきな憧憬が綴られているのである。これもすでに引用した文章ではあるが、物語への純粋な憧れを語った記事として、『蜻蛉日記』との対照性という観点から、もう一度読み返してみたい。ここでは、上総介としての任期を終えた父親に伴われて上洛の途に就くことになったという事実までもが、「京にとく上げたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」という作者の願いに、薬師仏が感応したかのように書きなされているのである。

あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間宵居などに、姉継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京にとく上げたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」と、身を捨てて額をつき祈り申すほどに、十三になる年、のほらむとて九月三日門出して、いまたちといふ所にうつる。

『蜻蛉日記』と『更級日記』の起筆部を並べて、仮に文学史的知識を忘れて、単純に作者と物語との関係という一点に的を絞って考えてみた場合、「古物語」の「そらごと」に批判的なまなざしを向ける『蜻蛉日記』と、物語に憧れる少女の姿を活写した『更級日記』との間に、史実に反する先後関係が予想されたとしても、あながち誤りとも言えないであろう。では、一見して論理的矛盾を内包するようにも見える、こうした奇妙な事態が出来したのはなぜであろうか。孝標女は『蜻蛉日記』の存在を意識することもなく『更級日記』の筆を執ったのかと言えば、もちろんそんなことは有り得ない。

『更級日記』の中に、『蜻蛉日記』を読んだという直接的記述は見当たらないが、この日記の執筆に当たって『蜻蛉日記』の存在が意識されていたことは、両作品の類似性と対照性のどちらの面からも指摘することができる。『更級日記』と『蜻蛉日記』の類似表現については、ここで具体例を挙げることは省略するが、物語記事を中心に、いくつもの類似表現を見いだすことができる。対照性という点については、たとえば『更級日記』が夫との関係について極端なまでに省筆している点など、対立項としての『蜻蛉日記』の存在を抜きにしては説明がつかないのである。結婚生活の実態がなかったのならともかく、『更級日記』の描いた人生の中には、結婚後の長い時間が含まれており、その間に出産や子育ても経験しているのだから、語るべきことがなかったとか書き忘れたといった理由は成り立つはずもないのだ。すなわち、自伝作品としての『更級日記』の執筆に当たって、自身の「身の上」と物語との関係を作品の重要なテーマとして設定したとき、孝標女は、「古物語」の「そらごと」に対する『蜻蛉日記』の批判を承知の上でそれを行なったのであり、そこには当然ながら様々な作家的計算が働いていたと考えられるのである。

物語に幻惑される少女の姿を描いた『更級日記』冒頭部は、もしそこに持ち出される物語が、『蜻蛉日記』の批判する『古物語』と同水準の類であったならば、ひどく愚かしい文章ということになっていただろう。それは、単に田舎育ちの少女の愚かしさの強調といったレヴェルの問題にはとどまらない。『蜻蛉日記』の「古物語」批判にどう対処するかという点に関して、孝標女は紫式部と同じ立場に立たされているのであり、『蜻蛉日記』の言う「古物語」と同種の物語に心奪われる人物を無批判に造形したのは（しかもこの場合、造形されるのは作者その人のイメージなのだから）、『更級日記』という作品そのものが、先行作品から何も学ばない、文学史的自己認識の欠落した作品と見なされる結果にもつながったはずである。

『更級日記』が、起筆早々「光源氏」という固有名詞を登場させているのは、作者自身がそうした危険性に自覚的であったことの何よりの証左と言えるのではないか。「あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方」という辺境の地に身を置く少女が、姉や継母の話を通じて、まだ見ぬ『源氏物語』に幻惑されるという事態は、『蜻蛉日記』以降の文学史が、今やまったく新しい段階に入ったことを、生々しく読者に伝える記述となっているのである。少なくとも孝標女の期待する『更級日記』の読者、すなわち『源氏物語』を愛読して育った新世代の読者が、その点を見誤ることはないだろう。

菅原孝標の上総介としての任期は、寛仁元年～同4年（1017年～1020年）であり、これは『源氏物語』の成立からわずか数年後のことである。物語の入手困難な辺境で暮らす孝標女が、姉や継母の提供する話題を通じて「光源氏のあるやう」を知るという『更

『更級日記』冒頭の記述は、『源氏物語』成立直後の出来事として、この物語の流布の実態を窺わせる貴重な史料である。しかし、そうした史料的价值以上に興味深いのは、この書き出しから、『更級日記』執筆時の作者が、自身の「身の上」に関わる『源氏物語』の個人史的意味と同時に、その文学史的意味をも正確に見定めていたことが知られるという点である。すなわち、『蜻蛉日記』における「古物語」批判の存在にもかかわらず、敢えて物語と人生の関係を『更級日記』の中心テーマに設定したとき、孝標女には、『蜻蛉日記』に対する『源氏物語』の文学史的立場が、正しく理解されていたのである。物心のつく頃に早くも『源氏物語』に魅了され、その後も常にこの物語を意識しながら成長した自分と、「古物語」の「そらごと」を相手に娘時代を送るしかなかった道綱母との間には、物語との関係に決定的な差異が存在するという自覚が、『更級日記』のそのような書き出しを導いたことは間違いあるまい。『蜻蛉日記』の素朴な物語批判から数十年の後に、平安文学は、物語との関係それ自体を「身の上」のこととして作品化するような地平にまで到達してしまったのである⁷。

⁷ こうした平安文学のありよう対比するために、先ほどCervantesの作品を引き合いに出したが、そこにGustave Flaubert (1821年～1880年)やGuy de Maupassant (1850年～1893年)の名前を付け加えてみると、事態の近似性はより明瞭になるのではあるまいか。『ボヴァリー夫人』(1857年)や『女の一生』(1883年)の起筆部を読むだけでも、『蜻蛉日記』や『更級日記』との類似性について色々と考えさせられるはずだ。しかも『女の一生』のジャンヌもボヴァリー夫人も男性作家の想像の産物であるのに対して、平安時代の日本では、女性たち自身が、物語と人生に関する思索をめぐらし、豊かな創作活動を展開していたのである。

(本学教授)